

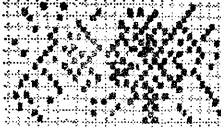
デズモンド・モリス (1928— )

白井尚之訳

『サッカー人間学 マンウォッチングⅡ』

小学館 A4判 320 ページ

1983年 定価 4,800円



遠藤 保子

この本は、一九七七年に出版された「マンウォッチング」の姉妹編ともいべきもので、サッカーを通して「人間とは何か」を考えさせるユニークな本である。

著者デズモンド・モリスは、前書「マンウォッチング」の中で、人間の動作、しぐさ等の身体活動を理解しながら、人間行動に関する予測性を高めようとした。というのは、人は言語に重点を置きすぎ、動作や姿勢、表情が何を語っているのか忘れがちになるという反省にたつたからだ。

人間の行動を観察する対象としては、種々の動作、ジェスチャー、変異されたジェスチャー、様々な信号、身体装飾、遊び、スポーツ行動等があげられている。

そして、今回「サッカー人間学」では、スポーツの中でも、特に盛んに行なわれているサッカーに焦点をあて、深化した知見を述べている。

このように、人間の行動を対象として研究している学者は、モリスの他にドイツではアイベル・アイベスフェルト、その弟子ハイデ・シュブレスニー、日本では、多田道太郎、香原志勢らがいる。「サッカー人間学」とあわせて、彼らの著書も読めば一層興味深く、人間の行動を把握することができよう。

また、人間から動物の行動に目を向け、コンラット・ローレンツや、モリスに多大な影響を与えた、河合雅雄等京都大学霊長類研究者達の著書も参照、比較すれば、人間行動の特異性を浮きぼりにしながら、巨視的にいうと、「人間とは何か」の問いかけにひとつの回答が得られそうである。

モリスは「マンウォッチング」の中でスポーツ活動は、本質的に、狩猟行動の形を変えたものだとし、生物学的に見て、現代のサッカー選手は、姿を変えた狩猟者の群れと

みなしている。

本書でも、この考えを基調にしながら、サッカー集団を部族の概念でとらえようとした。

これは、サッカー活動のそれぞれの中心、つまり各サッカー・クラブは、小部族にも似た組織をもち、部族のなわばりがあり、長老呪術医、英雄、同調者、その他の部族民をすべて抱えているということだから。

そこで、著者モリスは、部族のルーツをさぐることから始め、儀式、英雄、装飾、長老、随行者、言語と七項目にわたって論を展開し、サッカーの全貌を明らかにしようとした。

サッカー部族のルーツは、狩猟を生業（なまわ）にしていた太古にさかのぼりながら、ルーツのたどる道程には四つの主な過程があった。

第一に、生存のための狩猟期で、これは人類の太古の先祖が死活問題として、狩り出しと屠殺を行っていた時代である。第二に、スポーツとしての狩猟期で、これは人類が食料を求めて狩猟を行なう必要がなくなった後も、なお狩猟での活動を続けていた時代である。第三に、円形闘技場が舞台の流血スポーツ期で、この時代には狩猟が原野から都市に移された。最後に、競技場での球技スポーツ期が訪れ、昔から流血をとまなうスポーツが近代球技にかわった。

このように殺傷力のある武器は無害なボールとなり、獲物はゴールに変化はしたものの、サッカー選手は、狙いが正確で、得点できた時には、獲物を殺した狩猟家が味わう勝利の喜びを得るという。

狩猟からサッカーへという変遷過程で最も重大な要因として、生産形態が農耕へ移行することが挙げられている。つまり農耕をするということは、狩猟が廃棄されていくことを意味するからだ。

しかし、狩猟技術と狩猟への衝動は残存していて、スポーツのための狩猟とか、古代ギリシアの運動競技にみられるような狩猟とは異なる、別の行動パターンに変形してくる。

ただ、古代ギリシアの運動競技の発生論に関しては、体育学者のユニットナーやガードナーらが、競技をすることは神が裁きをするからだ。とか、他民族（ドーリア人）が先住民を支配していく過程の中で競技が生まれてきた等々を指適しているので、狩猟の観点からだけでは説明されえない。

いずれにしても、サッカーのいまわし、例えば、選手がゴールを「襲い」、ボールをゴールに「放つ」等の表現は、見せかけの狩猟としてのサッカーの本質を明かす重要な手がかりになる。

サッカーは、儀式的狩猟の顔を有しながら、様式化された戦闘として、地位ディスプレイとして、宗教儀式として、社会的興奮

劑として、ビッグ・ビジネスとして、そして劇場公演としての様々な顔を有している。

これらの顔を紹介しながら、部族の儀式―掟、なわばり、タブー、罰、戦略、戦術、中心儀式、クライマックスとしての得点、勝利の祝いを問題視していく。

さらに、サッカー部族の花形選手達は、庶民の真の英雄ではないかと問いかけながら、英雄が生まれる背景、人格、練習や指導法、英雄がもっているお守りやおまじないに目を向ける。

こうして話は、装飾（ボールやサッカー選手の服装の変化）や部族の長老、つまり神経中枢部に匹敵する理事会、理事会にとつて恐怖と畏敬の的であり超然と威敵を保っている部族の裁判官（レフェリーとラインズマン）へと展開していく。

テーマのユニーク性もさることながら、サッカー独特の動作や姿勢を撮った写真も豊富に掲載されているので、パラパラめくって写真だけをおつても楽しめる本だ。

私がこの本を本欄でとりあげようとしたきっかけも、実はこの写真をみたことにある。部族民の写真と中世、現代のサッカーの写真が、鮮やかな対比となって、現代にくすぶる部族性がうきぼりにされているのに、ハッとしたからであり、こういうテーマのとらえ方があるのかと驚いたからでもある。

私は、この本に載っている部族民の写真をみるにつけ、又、サッカーの様々な動作写真をみるにつけ、今まで私が現地調査してきた部族民（ヨルバ族・ナイジェリア）の動作を思いおこしていた。

肯定の返事をする時、一般的には首を上から下に振りおろすが、ヨルバ族では、下から上つまり首もたげをする。モリスの本では、首もたげ（＝首しゃくり）はギリシア人の否定とあり、ギリシア及び元ギリシア植民地の地域で、否定を示す動作特徴とされている。

更に、ややこしいことに、ヨルバ人は、否定疑問文に対して否定の回答をする時、日本語の発想と同じく、まず「はい」といつてから、「……ない。」と答える。

もし、ヨルバ人が、首もたげをしながら、「はい。……ない」と本書の書評をした場合、著者モリス（英国人）は、彼の返事をイエスととるのだろうか、ノーととるのだろうか。

動作ひとつにしても、不思議な発見ができるようだ。この本を布石として、今まで気がつかなかった、隠された人間性に新しい光があてられたらすばらしい。

（お茶の水女子大学）